IS～黒き学園の守護者～

tack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～黒き学園の守護者～

【Ｎコード】
Ｎ０２７４Ｗ

【作者名】
ｔａｃｋ

【あらすじ】
この作品は、一夏のハーレムは好きだが、それ以上に年上のメンバーが好きという作者の好みから生まれた作品です。
そのため、オリジナル展開、果てには、キャラ崩壊が多数発生します。
あしからず。

プロローグ

ＩＳ学園。
女性にしか使えないとされるＩＳの事について、学ぶための世界唯一の学校だ。
そのため、世界中から常に目を向けられ、学園内で有名な人物は、色々な意味で目を付けられる事になる。
そのため、学園には様々な意味で腕の立つ人間が多く在籍していた。

「世界初の男性ＩＳ操縦者・織斑一夏、か。」

「どうした？」

「いや、まさか、一夏がＩＳ操縦者になるとはねぇと。」

「お前はいつまでその話をしている。一夏がＩＳ学園に入って、もう三ヶ月だぞ。」

「まぁな。そのおかげで、ここでこんな事もできる訳だし。」

「バカが。お前はそればっかりだな。」

「そういうなよ。こうして、お前と居られるってだけなんだから。」

「全く。知らん。」

顔を赤くして、そっぽを向く。
その愛らしさに俺は、後から抱きついた。

「なっ、いきなり、なにをする！」
「だってよぉ。こんなかわいい奴、抱きしめずにはいられるか。いや、いられない。」
「いちいち、反語にしなくていい。」
こんな感じで、夜は更けていった。

朝になって、思った。
「はぁ、俺もＩＳ学園にでもいくかな。」
「なにっ！？　お前は、一体何を言ってる。お前の年で、高校生にでも戻るつもりか？」
「そうじゃねぇよ。というか、お前と同い年だろが。」
「まさか、教師にでもなる気か。」
「それ以外あるまい。」
「どうしてっ！」
「どうしてって、なんでそんなに食い下がる？」
「うるさい。どうしてだ！」

なんで、こんな焦ってんだ。

「一夏が狙われている。それは、いままでの事件とかからも分かっている。だが、その隙を突いて、ほかの奴を狙ってくる奴がいるかもしれない。その時、お前、その体でいつまで満足戦える？」

「それは・・・・」

「だからだよ。お前に、無茶はさせたくない。」

「・・・・・・」

彼女は黙り込む。

「それに、俺の弟子もある程度戦えるようになったしな。」

「で、弟子？」

しかし、俺の次の言葉は予想外の事だったらしい。

驚いている。

「あれ？　言ってなかったっけ？」

「私は、聞いてないぞ。」

「四人か。ウサギの紹介でな。大分、前からなんだが。」

「そういう事は、あらかじめ言わないか！」

こうして、俺は、ＩＳ学園に入る事を決めた。

黒き守護者

ーｓｉｄｅ　一夏ー

「今日は、お前達に知らせる事がある。」

ＨＲの時間。

いきなり、千冬姉が言い出した。（いつものこと）

「私は、今日でお前達の担任から外れる事になった。」

へっ？

「「「「「・・・・・・」」」」」

「どうした？」

「「「「「えええええええええ――――――っ！」」」」」

ほんとにいきなりの事で、みんな反応が一瞬遅れた。

「先生、どういう事ですかっ！」

「なにか理由はっ！」

「私達、なにかしましたかっ！」

皆、驚きのあまり好き勝手言っていくが、

「静かに！」

「「「「「・・・・・・・・・」」」」」

千冬姉の一言で、全員が静まる。

「えー。まず、担任から外れる理由は、至極個人的な理由だ。」

皆、千冬姉の言葉を一言一句聞き逃さないよう、耳を傾ける。

「そして、私だが、担任を外れるが、学校を辞める訳ではない。寮の管理がしばらくの仕事になる。」

あれ、じゃあ、なんで担任から外れるんだ。

「そして、お前達には、新しい担任が就く。今日は、今からその先生を紹介する。」

一呼吸おいて、

「なにか、質問がある奴はいるか？」

「はい。」

「なんだ？」

「個人的な理由ってなんですか？」

まぁ、普通にその質問だな。

「しばらくの間、ＩＳに乗れなくなったからだ。」

「えっ？」

一瞬、その場が凍った。

「ど、どういうことですか？」

「どこか悪いんですか？」

「何かの責任を取ってですか。」

また、騒がしくなる。

「静かにしろ！」

「「「「「・・・・・・・」」」」」

「別に怪我や病気という理由ではない。心配するような理由ではないので安心しろ。」

「そうなんだ。」

「なら、安心だね。」

「でも、他に乗れなくなるってなんだろう。」

とりあえず、皆安心して静かになった。

「それでは、明日からお前達の担任になる先生を紹介する。

入ってきてください。」

―side　out―

―side　???―

千冬の言葉を聞いて、中に入っていく。

皆、驚いた目でこちらを見ていく。

そりゃそうだ。

本来、この学園の教師で俺みたいな奴はいない。

「え～、明日からこのクラスの担任になる織斑秋夜だ。よろしくな。」

「「「「「・・・・・・・」」」」」

え～と、驚くのは構わないんだが、なんか反応してくれないか。

「見間違いじゃないわね。」

「うん。間違いないよ。」

「「「「「・・・・・・・」」」」」

ちらほら、反応が見えてきた。

「「「「「男！？」」」」」

ようやく、全員戻ってきたか。

「は～い。とりあえず、静かにしろ。みんな、少々驚いただろうが、俺は男だから。」

「ちょっと、待ってほしいですわ！」

「うん？」

確か、あれは、イギリスの代表候補生の

「オルコットさんだったか？」

「ええ。そうですけど。なぜ、男の方が担任なのですか？」

「ここに割り振られたから。」

「そういう事ではありませんわ。なぜ、ＩＳを操縦できない方が担任なのですか？」

「ああ、そういう事。それなら大丈夫。俺、ＩＳ使えるから。」

ぶっちゃけちゃうと、俺、一夏早く使えてたし。

「それについては、皆に実力を知ってもらうために、後で模擬戦を

してもらう。」

千冬のフォローで、皆納得。

「なにか、質問はあるか～。」

「はい。」

「はいはい。どうぞ～。」

あの子は、フランスの代表候補生、シャルロット・デュノアか。

「織斑先生との関係は？」

いずれは来ると思ってたけど。

「夫婦。」

「「「「「・・・・・・」」」」」

一々、沈黙する生徒達だなぁ～。

「「「「「えええええええええええええええ――――――っ！」」」」」

「そんな。嘘。」

「お姉さま～。」

なんか、嘆きの声しか聞こえない。

「じゃあ」

「もしかして」

「織斑先生の」

「個人的な理由って」

おお、息ぴったりだ。

「「「「・・・・・」」」」

守護者の出陣

「じゃあ、次は模擬戦の時間です。専用機持ちは準備して、アリーナに行ってください。」

そう言って、俺は、外に模擬戦の準備にかかる。

「さて、どうするか。」

専用機持ちは、一組に、一夏に箒、オルコットにデュノア、それにボーデヴィッヒ。

後、二組の凰か。

てことは六対一か。

「いやはやいやはや。」

「どうした？」

嘆くと千冬に声をかけられる。

「いや、六機まとめて相手にするのは、骨が折れるとね～」

「六機を相手にできないではなく骨が折れるか。さすがだな。」

「まぁ、さすがに国家代表相手はきついが奴らはまだガキだ。軍属だろがなんだろうがな。」

「それはそうだな。」

「大人の強かさってヤツを見せ付けてやるよ。じゃな～」

そこで千冬と別れ、

「あっ、忘れ物。」

振り返り、千冬の唇を奪う。

「エネルギー補給。」

「は、早く行け！　この馬鹿者！」

顔真っ赤にしてやんの。

かわいいねぇ～。

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

－ｓｉｄｅ　一夏－

「一年の専用機持ち全員召集。これって、六対一って事だよね」

「そうでしょうね。つまり、なめられるって事ね。」

「いくら相手が教師でも、六機で一機に遅れはとりませんわ。」

「うむ。それに教官との事もある。」
四人はなめられてると思っているらしいが、
「あの人が相手か。」
「手は抜けないな。」
俺と箒は違った。
「二人共、随分弱気ですわね。」
「そうよ。いくらなんでも、六機相手は無理でしょう。」
「いや、あの人なら。」
「そうだな。六機でもまともに戦えるか。」
あの人とは、昔馴染みで、色々お世話になっているが、未だに底が知れない。
「というか、あの人なら、素手でもＩＳと戦えそう。」
「確かに。」
「いくらなんでも、それはないよ。」
「うむ。そんな男であれば世界のパワーバランスが狂うことになるぞ。」

だって、あの人、強いとかそうじゃなく凄すぎる。
強いや速いじゃなくてすごいのだ。

「まぁ、やるだけやるさ。」

「お前にはそれしかできないだろうが。」

「ち、織斑先生！」

気合を入れなおすと後に千冬姉がいた。

「どうしたんですか、先生。」

「いや、なに。少しばかり、お前達にアドバイスをな。」

「アドバイスですか。」

ラウラがアドバイスという言葉にいち早く反応する。

「ああ、別に難しい事じゃない。
アイツは、最初様子見をしてくる。その間に、どれだけダメージを与えられるか。
それが肝になってくる。」

「なるほど。」

鈴が納得する。

「でも、アドバイスするって事は、織斑先生から見て、僕達の方が不利って事ですよね。」

「ああ、そうなるな。」

「じゃあ、気を引き締めていこう。」

千冬姉の言葉で全員が気を引き締める。

「それじゃあ、作戦会議だ。」

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　秋夜―

アリーナのピットに一人、ＩＳの最終チェックをする。

「よし。問題無いな。」

あっ、そういえば、弟子達の模擬戦でハンデつけるのに、装備いじったんだった。

「まぁ、大丈夫か。」

とりあえず、チェック終了と。

「おっ、そろそろか。」

目蓋を閉じる。
そして、深呼吸。
「じゃあ、行こうか。暴れろ、黒覇！」

戦闘開始

「いや～、場内満員御礼てかぁ～。こんなトコじゃ、緊張して戦えねぇよ俺は。」

「そう言う割りに、顔に笑顔が張り付いてますよ。先生。」

「まぁな。お前らが、どうやって俺を叩きのめしてくれるのか楽しみでな。」

「それでしたら、すぐに分からせてさしあげますわ」

互いに挑発しあう。
まぁ、挑発にもなってないが。

「それでは、まもなく模擬戦を開始します。両陣営、準備してください。」

アナウンスで、互いに口を閉ざす。

「模擬戦、開始！」

「「食らいなさい。」」

開始と同時に
オルコットがスターライトｍｋ?、凰が龍砲、デュノアがガルム、ボーデヴィッヒがレールカノンを撃ってくる。

「うぉ、なんだ？　あぶねっ。」

全部を回避する。

「なんだ、なんだ。てっ、あぶねぇっつうの」

なんで、コイツら最初からこんなに飛ばして来てんだ？

「ハッ！」

「うぉっと。」

回避の隙を突いて近づいてきた箒の攻撃を避ける。

「そこだっ！」

次は、一夏かよっ！

内心、悪態をつきながら避ける。

「くそっ、なんだってんだ。」

様子見しようかと思ったら、俺に攻撃される事お構いなしに突っ込んできやがって。

やぶれかぶれの短期決戦か？

いや、違うな。

数はあっちが上。なら、持久戦に持ち込むのがベターだ。

となると

「千冬の入れ知恵だな。」

「「「「「「っ！？」」」」」」

全員が同じ反応。

「やっぱりか。アイツめ、俺が様子見から入るの言いやがったな。」

全く、おかげで忙しい忙しい。

「さて、どうするかっと、あぶねぇっ！」

箒からのレーザーをかわす。

そういやあの雨月だっけか？　あれって、刺突の時にレーザー出るんだっけ、かっ！

ラウラの砲撃をかわす。

「あああああああ、考え事もできねぇじゃねえか。忙しすぎるぞ、って言ってるそばから～。」

デュノアと凰の攻撃をかわす。

コイツら面倒すぎるって、あぶねぇ！

「あれが、ブルーティアーズか。混戦中だと洒落にならん。」

安全圏で悠々射撃に専念しやがって。

「てっ、テメェはいつの間にそこに来てんだよ、一夏！」

「悪いけど、勝たせてもらう。」
来たのが分かればかわせるって、瞬間加速！
「ちぃっ！」
機体のバランスを無理矢理崩してかわす。
「瞬間加速なんて高等テク使ってんじゃねぇよ！」
「千冬姉の直伝だからな！」
アイツはここでも俺を苦しめるか。
「そして、悪いけど」
「僕も使えるんですよね。」
「デュノアもかっ！」
こいつ等マジうぜぇぇぇぇぇぇぇっ！
てっ、うしろからエネルギー刃！
「危ねぇって言ってんだろが！」
あれは、箒か。
っ！　今度はワイヤーに青竜刀。
「で、こっちからブルーティアーズと。」

とりあえず避けた。

「あれ？　一夏は？　うげっ！」

なんかどでかいの撃ってきやがった。

「クソッ！」

あれが噂の雪羅か。

あんなの食らってやれるか。

ん？　なんだ、攻撃が止んだ？

「あの先生なんなの！　一発も当たんないなんて。」

「そうですわ。死角を突いて撃った狙撃も他の攻撃を避けながらさけるなんて。」

「まさか、これ程とは。」

「このままじゃあ、こっちがジリ貧だよ。なんとか、一発当てないと。」

「さすがの規格外ぶり。反則の域だ。」

「昔よりも規格外ぶりが上がってないか？　なぁ、箒。」

好き勝手言ってるな。

ちなみに、凰、オルコット、ボーデヴィッヒ、デュノア、箒、一夏の順な。

でも、攻撃をやめて話し合いって事は、それなりに手札を使い切ったのとエネルギーの消費か。
まぁ、あれだけ好き放題撃てばある程度はこうなるか。

「じゃあ、そろそろいいか。」

黒き覇者への奉げモノだ。

守護者の実力

俺は、右手に刀タイプの武器、闇夢を展開する。

「それじゃあ、そろそろこっちからも行くぞ。」

そう言って、接近する。

「は、速いっ！」

デュノアが反応するが、そりゃあね。
この黒覇は、火力と機動力に特化させてる機体だ。
この程度で驚かれちゃ困る。

ボーデヴィッヒやデュノアが反応して迎撃してくるが、

「まだまだ、甘いな～」

射撃をかわしながら、六機の間通り、オルコットの背後をとる。
まぁ、他の奴にも贈り物しといたけど。

「そら、まず一撃！」

でも、とりあえずオルコットから落としにかかる。

「くっ。」

きれいに一発入る。

「しかし、零落白夜でも無ければそう簡単に落ちませんわ。」
まぁ、確かにね。
でも、余裕は無いと思うが。
「えっ、なんですの？　シールドエネルギーがっ！」
ただの刀なんか使ってるわけねぇだろが。
「援護する！」
「行くわよ！」
他の奴が援護にしようと近づいてくる。
でも、
「そこからは行き止まりだ。Ｂｏｍｂ」
ヴァァア――――――ン。
他の五機を爆発が覆う。
「さて、どれだけ、残ってるかな？」
煙が晴れる。そこには、
「くぅ。」
「痛いわね。」

「今ので、エネルギーがかなり持ってかれた。」
「僕は、とりあえずシールドでなんとか。」
「俺は、ほとんどガス欠だ。」
全員まだ残ってるが、満身創痍ってとこか。
で、セシリアは、っと。
「いつまで、高みの見物をしているおつもりですか？」
さすがにあれ一発じゃ無理か。
「別に見物決め込んでる訳じゃない。」
セシリアは、狙撃手としてなのか他の五機に合流する。
それを見て、闇夢の変わりに煉獄を展開する。
「あれは、トンファーかな。でも、形がちょっと変だね。」
「とにかく、気をつけるに越したことはないな。」
ラウラのその一言で六機が様子見に入る。
俺もそれを見てるだけなので、膠着するが、
「はい、終わり。」

その言葉と同時に、煉獄からエネルギー弾を六機の中心に撃ち込む。

「かわせ！」

一夏の声で全員反応するが、自分に来てない弾なので、全員がその弾を目で追う。

「まさか！」

さっきまでの戦闘から、デュノアが気づく。

だが、

「遅い！　ｂｕｒｎだ！」

エネルギー弾が俺の言葉と同時に拡散する。

「「「「「「うわぁぁぁぁぁぁ――――――――っ！」」」」」」

それで、勝負は決まった。

守護者の実力（後書き）

ＩＳ紹介
黒覇＜くろは＞

漆黒の機体。
見た目からして悪そうな感じの機体。
特徴は、所々に大きな棘がついてる。

機体性能は、火力と機動力に特化している。
機動力に関しては、赤椿さえも上回る。
そして、エネルギーと拡張容量を大きくするために限界まで防御を削っている。

武器
闇夢＜やみゆめ＞
黒い長刀。
雪片のような一撃必殺や雨月、空裂のレーザー、エネルギー刃などの機能はないが、それに匹敵する特殊で厄介な能力がある。（セシリアの動揺の理由。本編で明かされてないのでまだ書きません。）

???
浮遊機雷
便利だが、誘爆の危険がある。威力が高く、攻撃範囲が広い。
（詳しく名前が出てから。ちなみ、最初の爆発はこれのせいです。）

煉獄＜れんごく＞
ガンズトンファー（トンファー型の銃器）
かなり大口径で、威力と攻撃範囲が広い。しかし、弾速が遅いため、

単発ではまず通用しない。
チャージ機能があり、チャージの度合いで攻撃力と攻撃範囲が変わる。
（これ以外、まともな紹介ができてない気が・・・・・）

試合後

―ｓｉｄｅ　一夏―

「屈辱ですわ。いくら教師とはいえ六機で戦ってたった一機に。」

「うん。勝てなくても、引き分けに持ってけると思ったんだけど。先生が攻撃し始めてからがあっという間だったね。」

「というよりも、六機をたった三回の攻撃で倒すなんて化物じゃないの。」

「そうだな。いくら、前半で攻撃にエネルギーをまわしたと言え。」

口々にさっきの戦闘に対して、言葉を述べる。

「というか、なんなのよ。あの攻撃力と機動力は。私の甲龍でもあんなの無理、というか箒の赤椿ぐらいしか太刀打ちできないんじゃない？」

「いや、スピードは私の赤椿よりも上だろう。」

「となると、あれも第四世代？」

「まさかな。」

確かに、あのスピードは速かった。

まだ、使いこなせてないからなんと言えないが、たぶん白式でも追いつけない。

「私が受けたあの攻撃も、どういうモノか分かっていませんわ。」
「そういえば、あれどうしたの？　なんかすごく驚いてたけど。」
「どうしたもこうしたもありませんわ！　攻撃を受けた後、シールドエネルギーがどんどん減っていくんですもの。」
「えっ、それ普通じゃない？」
セシリアの言葉に返す鈴。
確かに、攻撃を受けたらシールドエネルギーは減るから普通だと思う。
「そうではないのです。攻撃を受けた分のエネルギーは確かに減りましたわ。
その後に、エネルギーを消費してもいないにどんどん減っていくですわ！」
「なんだ。どういう事だ？」
セシリアの言う事を皆理解できず、ラウラが更に問う。
「なんと言えばいいでしょう。こう、後なってもジワジワとエネルギーが減っていくんですわ。」
それって、
「もしかして、ゲームの毒状態みたいなものか？」

「ゲームがどういうモノかわかりませんが、そうですね。毒のようねモノでしょう。」

「それって、ありえるの？　だって、ＩＳって機械だよ。」

俺の言葉にセシリアは同意するが、シャルは信じられないといった顔をしている。

そりゃ、機械に毒が効くなんて効いたことないし。

「お前達、いつまでそうやっているつもりだ。」

「織斑先生！」

「模擬戦は終了。さっさと片付けて戻れ。」

千冬姉に言われ、皆で戻る事になった。

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

－ｓｉｄｅ　秋夜－

「ふぅ～。終わった終わった。」

まぁ、所々ヒヤッとしたが、まだまだだな。

「どうだ？　うちの生徒は。」

「まだまだだが、見込みはある。お前だってそう思ったろ？　千冬。」

千冬がうなずく。

「まぁ、見たとここの学園で俺の相手が務まるの一人か。」

「更識楯無か。確かに、あいつなら練習相手にはなるか。国家代表だしな。」

確か、ロシアだっけか？

あいつは、なかなかいい性格してるからな。所々、危なくなるだろう。

「二年と三年の、え～、何だっけ？　専用機持ち。」

「フォルテとダリルか？」

「おお、そいつら。あいつらは相手になんねぇな。あんな守りじゃ俺の攻撃に耐えられれん。」

「それは、お前が捻くれているからだろう。」

そう言うなよ。俺が曲がってないなんて言った事ないだろうに。

「お前の弟子と比べるとどうだ？」

よっぽど、俺の弟子が気になるのね。

「比べるまでもない。俺が直々に教えてるんだぜ。ここみたいな培養所といっしょにするなよ。」

しかも、機体はウサギ社製。

「所で、お前、その弟子どうして来たんだ？」

「ウサギに預けてきた。」

うん？　ウサギにあずけた？

今なんか、嫌なもん感じたぞ。

「それで大丈夫なのか？」

「うん。俺も何か大きな失敗をした気がして仕方が無い。」

だって、汗止まらないもん。

一夏の憂鬱

「という訳で、お前には寮で生活してもらう。」

どうしてこうなったかは

〜15分前〜

「織斑先生。ちょっといいですか？」

「「はい」」

・・・・・・・・・・・・どっちっ？

「二人共来て下さい。」

両方か。

「で、なんですか？　何か問題でも。」

「特別、私達二人が呼ばれる理由に心当たりはありませんが。」

「織斑先生、いえ、秋夜先生の住まいについてです。」

俺の家？　近くのアパート借りる予定だけど。

「学生寮に住んでください。まぁ、理由は織斑君と一緒です。」

「で、部屋は？」

「あなた達は、夫婦なのですよね？」

そうだけど。

ああ！　そういう。

「分かりました。千冬と同室ですね。」

「分かって頂いて幸いです。」

「分かりました。これから、寮に引っ越します。」

「生徒達をよろしくお願いしますね。」

〜現在〜

「んじゃ、部屋に案内してくれ。」

「ああ。」

寮に向かって歩いて行く。

まだ、早い時間で学校に生徒がちらほら。

「ところで、お前、部屋片付けてるか？」

「ギクッ」

図星ね。

「相変わらずだね～」
「うるさい。忙しいんだ。」
「一夏でも呼ぶか」
戦力多けりゃ多いほどいい。
身動きとれない程だと邪魔だけど。
「一夏なら訓練中だろ。」
「じゃあ、ちょっと見ていくか。」
そう言って、アリーナに向かう。
―side out―

―side 一夏―
「くそっ」
また模擬戦で負けた。
今日は、皆、気合が入っている。無理もないか、あれで負けたら。
「次は、一矢報いますわ！」
「絶対、ぶちかましてやるんだから！」

特に、セシリアと鈴だが。

「はい。駄目だね～、一夏君。そんなんじゃ、会長さん困っちゃうよ。」

「そうですね。」

「それにしても、今日は一段と元気がないね。
先生にやられちゃったのがそんなにショックだった？」

「ギクッ」

自分で言っといてなんだけど、なんだこの擬音。

「相手が秋夜さんじゃ無理も無いよ。切り替えないと駄目だよ。」

「楯無さんだったら、どこまで戦えますか？」

「う～ん、そこそこ戦えるけど、勝てはしないかな。」

「そんだけ、凄いんだ。さすがだな。」

「まぁな。でも、弱気なお前に言われてもうれしくないね～。」

「へっ？」

―side out―

―ｓｉｄｅ　秋夜―

「よっ！」

やっぱりというか、思ったとおりの光景があった。

「ＩＳは女性の乗り物だから、たまたま動かした俺は、弱くてしかたないなんて思ってねぇだろうな、一夏。」

「そんな訳ないだろ。」

「んじゃ、同じ男として、どうなんだろってとこか。」

「うっ」

ああ、やっぱりか。

今まで、男の比較相手が居なかったからな。急に比較対象ができて、弱気なってんのな。

「んじゃ、切り替えろ。せっかく、お前の目標になりに来てやってんだ。しっかりしやがれ。」

「えっ？　そんなために来たのか？」

「バカか、てめぇ！　そんなことじゃねぇだろが。」

「だって、目標は千冬姉が。」

「お前は、千冬を神格化させてる所があるからな。」
後の千冬に目を向けながら言う。
そして、一夏の頭を掴み、
「ガキが、俯いてんじゃねぇよ！」
弄り倒す。
「いつまでもガキ扱いしやがって。」
「じゃあ、ガキじゃねぇって事を俺に見せてみろ。」
「分かったよ！　絶対、秋兄なんか超えてやる。」
そう叫んで、一夏は、訓練に戻った。
単純な奴め。

会長？（前書き）

今回かなり短めです。

会長？

「すまないな、秋夜。」

「謝るな。義弟を慰めるのに理由はいらねぇよ。」

一夏は、普段バカみたいに前向きなのに、時たまちょっとした事で落ち込む事がある。
でも、単純な奴だから、焚きつけてやればすぐに元に戻る。

「さすがですね、秋夜さん！」

「うぉ、た、楯無か。」

いつの間にか、楯無が急接近していた。

「覚えてくれましたか。嬉しいです。」

「まぁな。お前は、中々の有望株だったからな。」

「そんな事はないですよ。」

「所で、お前は、ここで何してるんだ？」

とりあえず話を逸らそう。いつまでも、褒めちぎってきそうな勢いだし。

「放課後はいつも一夏君たちに指導してるんですよ。」

「そうか～。お前が付いてるなら安心だな。」

「そんな事ないですよ～。」

なんか、ちょっとずつこっちに近づいてる気がするのは、気のせいだろうか？

「秋夜さんに比べたら、まだまだですし。
私が指導をお願いしたいくらいです。二人きりで。」

「お前だったら、そんな自分でも俺の指導が必要ないぐらいのレベルでやってるだろ。」

ロシア代表が低レベルな訓練してる訳がないし。

「いえいえ。そんな事は無いです。ぜひとも指導をお願いします。」

だから、なんか近いって！

「今から、なんてどうですか？」

いやいや、だから腕を取るな！　胸が当たってるから！
後からとんでもない視線、いや、死線が飛んできてるから。

「んん。更識。そろそろ指導に戻ってやれ。」

とりあえず、これは天使の声か、それとも悪魔の声か？

「そうですね。それでは、戻るとします。それではまた今度、秋夜さん。」

そう言って、楯無は戻っていくんだが、なぜか背中が冷たいんだけど。

「どうだった？　奴の胸の感触は。」

「いや、なんの話ですか？　千冬さん。」

振り返る振り返れん。どうする、俺！

「なぜ、そっちを向いている？　楯無の尻でも追いかけてる訳じゃないだろう？」

振り返っても死、振り返らずとも死。まさに、絶体絶命。

「そんな事はないですよ～。千冬さん。」

決心を決めて、振り返ると、

「それでは、緩んだ顔でも隠したかったのか？」

お、鬼がおる。

「そんｎ」

「言い訳は聴かん！」

ぎゃあああああああああああああああああああああああ

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

―side　一夏―

悲鳴を聞いて、声のした方をみるとボロボロになって、地に伏せている秋夜さんがいた。

旧友

「だるい。」

「お前は、相変わらずだな。」

今、俺の目の前には、一人の男が伏している。
この男は、俺の高校時代からの親友・岬修平。

「ああ～。」

「久々に二人で飲みに来たんだから起きろよ。」

そして、二人で居酒屋に飲みにきていた。

「そんな調子で、ちゃんと仕事してるのか？」

「してる。」

「まぁ、お前、ＩＳ関係だろ？　だったら、やってるか。」

「武器開発、機体開発、機体調整。」

「へぇ～。開発も混ざってんのね。」

こいつ、高校のときから機械にはめっぽう強く、プログラムとかに関して天才とも言われた。
束には、適わんけど。

「今は、武器メイン。機体は、倉持技研。」

「白式の所ね。」

まぁ、それは仕方ないだろう。
世界で一人の特異例が出たからな。

「にしても、お前は、ホントに相変わらずなのな。」

今も伏しているコイツは、とんでもない面倒くさがりなのだ。
前に一週間ぐらい、まともに食べてなく餓死しかけた事もあった。
その時の理由が、「準備が面倒。」

しかも、ルックスはそこらのモデルよりもいいのに、
面倒だという理由で、告白を無視しまくった結果、高校の時のあだ名が「残念王子」

「たくっ。どうせ彼女もできてないんだろ？」

「うむ。」

「彼女でも作れよ。それで、飯の用意ぐらいして貰え。」

「面倒。」

全く。

「それに、お前には言われたくない。」

「なんで！？　俺、籍入れてるし。」

「束が愚痴ってる。」

束ね。

「てっ、いうか。お前、束と連絡取ってんの？」

「ＩＳの武器とかの相談でね。」

「お前と束の共同制作か。」

使いたくねぇ。

だって、性能は最強だろうけど、絶対、悪趣味な武器かやらしい武器になる。

「お前には言われたくないし。」

「読むなよ。」

「顔に出てた。」

「それでも、口にするなよ。」

「じゃあ、人聞きの悪い事を言うな。」

「はいはい。」

というか、

「そういえば、束が愚痴ってるって？　お前に」

束は、まず人と話をするという事をしない。
昔馴染み以外で喋ってるのはコイツだけ。
千冬は、機械についてさっぱりだったし、
俺もＩＳの開発ができるようになったのはつい最近だ。

その点、コイツは当時から天才だったから、唯一、束の話についていけた。

それでも、愚痴ったりはしなかったと思うんだけど。

「束、たぶん、お前、まだ好き。」

ぐっ。それを持ち出すな。
軽く、千冬と束に告白された時を思い出す。
語らんけど。

「俺、ただのとばっちり。」

「それは・・・・な？」

「という訳で、今日はお前の奢り。」

「分かったよ。」

たまにはいいか。
世話になったりもしてるしな。

「という訳で、後二件は高級なところにしよ。」

「ちくしょ――――――――――――――――っ！」

なんで、コイツに頭上がんなくなったんだろ、俺。

四つの風～紅き南風～

「先生、おはよ～。」

「はい、おはよう。」

修平と飲みに行ってから、３日。
学園に入ってからは、３週間になる。
初日の放課後から次の日の朝までの記憶はなぜか無かったが、
とりあえず、何も問題も無く、平和に過ごしている。

「このまま、なんも起こんなきゃいいんだが。」

平和が一番だからね。

「だから、なんで怒ってんだよ？　箒。」

「怒ってないといってるだろうが！」

おうおう。やっとるやっとる。
あの二人も変わらんねぇ～

「おい。何やってる、馬鹿者。」

あれ～？　なんか、目の前に阿修羅が。

「今日は、朝から職員会議だと、昨日言ったはずだが？」

「いや～　忘れてる訳無いだろ～」
「では、なぜ、今、お前はここにいる？」
「なぜって、そりゃあ」
答えようとして、腕時計に目を向け、気づいた。
「うおおおおおおおおおおおお」
「気づいたか」
「時計が壊れてる～」
「そこではないわ！」
「えっ？」
「えっ？ではない。私の時計を見るがいい。」
「あっ。」
「今度こそ気づいたか？」
「時計、変えたんだな。」
「違うわ！　いや、確かに変えたが、そこではないわ！」
違う？　そこじゃない？

クンクン
「おっ、シャンプー変えたな。」
なんか柑橘系の匂いだ。
「そうじゃない！　時間を見ろ、時間を！」
おうおう、顔を真っ赤にしちまって。
「ん？　時間？」
８時を指してる。会議は７時５０分から。
「遅刻か。」
「そういう事だ。だから、早く行くぞ！」
「うわっ、ばかっ、そんな引っ張るな！」

～１５分後～

なぜ、俺は、こんな修羅場に立っているのだろう。
俺はただ、会議に終え、教室に向かおうとしただけなのだが。

そう思いながら、左腕を見ると、少し青っぽい髪の女子が抱きついていて、
後ろから、まるで、俺を射殺すが如し視線を浴びせられている。
他の先生に助けを求めようとも、皆、そそくさ職員室を出て行く。
仕方が無いとは思う。
だって、この職員室だけ重力違うんじゃないかってぐらい空気が重いもん。
ちなみに、今、職員室にいるの俺と千冬、オドオドしてる真耶、それに抱きついてる女子、
そして、それを呆れて見ている女子3人。
「マリィ。その辺でやめなさい。じゃないと、師匠死んじゃうから。」
3人の中で一番背の高い女子が言ったおかげで、
抱きついた女子は、離れた。
「それでは、師匠、私たちは教室に向かいます。」
「ああ。」
「それでは、飛鳥、後で」
抱きついた女子を含めた3人は、赤毛の女子を置いてそれぞれの教室に向かう。

「それじゃあ、俺達も行くか」

にしても、さっきよりはマシだが、それでも凄い視線を送られてるんだけど。

「たくっ」

自分の机に向かいながら、

「飛鳥、真耶。先に廊下に出てろ。」

そして、出て行ったのを確認した瞬間に

「へっ？」

千冬に接近、そして、唇を奪う。

「ほら、行くぞ。」

顔を真っ赤にしている千冬に言う。

「後で、説明しもらうからな。」

～5分後～

「急にだが、転校生を紹介する。」

教室に入って、真っ先にそれだけを言う。

「男ですか！」

「いや、普通にその可能性は限りなく低いだろう。」

生徒の言葉にコメントする。
普通の高校なら、その言葉は普通なんだけどね。

「じゃあ、入ってくれ。」

その言葉で入ってきたのは、さっき言ったとおり赤みがかった髪の女子。
背は平均ぐらい、ある一点と彼女の雰囲気がとても鋭いという事を除いては普通。

そのある一点とは、

「・・・・・大きい」

「・・・もしかしたら」

「・・・・・・・篠ノ之さんよりも」

クラスの視線がその一点に注がれる。

まぁ、歩くたびにあれだけ揺れちゃあ、仕方が無いとは思うけど。

「じゃあ、自己紹介な。」

「はい。」

その女子が一度目を閉じ、一歩踏み出す。

「俺の名前は、友崎飛鳥。色々勝手が違うと思うがよろしく。」

こうして、クラスにまた一人生徒が増えたとさ

四つの風～紅き南風～（後書き）

あれ？

飛鳥中心にするはずだったのに、全然、飛鳥関係ねえ

四つの風～金色の北風～

「それじゃあ、授業の用意をしとく様に。」

飛鳥を紹介し、ＨＲを終われせて、教室を出る。

飛鳥は早速、質問攻めにあっていた。

まぁ、特に、心配するような事はないだろうけど。

「で、奴等は何なんだ？」

千冬が、聞いてきた。

まぁ、さっきも後で聞くと言ってたしな。

「あいつ等は、俺の弟子だ。」

「あいつ等がか。」

「そう。なかなかの実力だぞ。一人は、俺等のお仲間だしな。」

「噂の新人か。」

「奴等も当然動いてる。だから、戦力の増強ってのもあるだろうな。」

「それか、後継者とでも言うべきか」

「そんなとこだ。」

次の時間は、ＩＳの実習だっけ？

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　？？？―

今、私は正直、自分の未熟さを思い知った。

この学校では、三年生唯一の専用機持ち。
そして、二年のフォルテとのコンビは「イージス」とも呼ばれる。
それに、私も自分なりに努力してきた。

これらの事から、私はそれなりの自信があった。
少なくとも、学園内で、一方的にやられる訳がないと思っていた。

しかし、

「もう、終わりですか？」

それは、この転入生によって砕かれた。

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　秋夜―

「随分騒がしいな。」

授業のために、アリーナに向かっていたのだが、
どうにも騒がしい。

「なぁ、千冬。今日、なんかあったっけ？」

「いや、何もないはずだ。」

じゃあ、どうした。
襲撃者とかだったら、警報がなるしな。

「今、三年のダリル先輩と転入生が戦ってるらしいよ！」

「ホント！」

「急ぎましょう！」

おいおい。

「だそうだぞ。」

「急ぐか。」

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　一夏―

授業を受けに来たら、先輩達が試合をしていた。

「え～と、三年のダリル先輩と・・・・誰だ？」

「なんか、転入生らしいね。」

「ダリル先輩の優勢なのかしら？」

「先輩は、かなり強いらしいわよ。」

「では、転入生がどこまでやれるか、という事か？」

「うむ。そうだろうな。」

俺といつものメンバーは、こんな感じで、試合を見ようとした。

しかし、

「なにこれ」

「ヘル・ハウンドよね？　あのやられてるの」

試合は一方的だった。
黄色い気体が、一方的にダリル先輩を攻めていた。
ダリル先輩は、逃げるばかり。
反撃を試みるのが分かるが、反撃に移れない。
「ダリル先輩って、確かイージスの一人だよね？」
「ええ。」
「その先輩が、逃げに徹して、防御してるのに。」
「全然、防げてない。」
「何なのだ。あの機体は。」
その言葉に対する言葉は、誰も言えなかった。
なぜなら、その搭乗者はおろか、機体すら見たことが無いものだったからだ。
「さすがだな。エレオ姉さん。」
えっ？
エレオ姉さん？
その言葉を、呟いた人を見る。
そこには、
「なんか用か？　織斑一夏。」

転校生の友崎飛鳥がいた。

「アンタ、噂の一組の転入生？」

「噂かどうか知らないが、俺が、その転入生だろう。」

「あなたは、何かあの機体について知っているのですか。」

鈴に続いてセシリアが、今誰もが知りたい事を問う。

「知ってるさ。あそこで戦ってるのは、俺の兄弟子だからな。」

「兄弟子だと？」

「ああ。あそこで戦っているエレオノール・フォン・キルヒアイゼンは俺の兄弟子だ。」

―side out

―side ダリル―

「くっ。」

「さぁ、まだまだ行きますよ。」

さっきから、ひたすら射撃に徹してるエレオノールに対し、私は接近を試みるのだが、
あまりの火力に近づけない。

「くそっ。何なんだ、あのガトリングは。」

武器の切り替えをしながらも、常に右のガトリングを打ってくるため、
接近のタイミングがない。

しかも、

「なんで、ガトリングがあんなに大口径なんだよ！」

ガトリングの威力が高いため、無視して突っ込めない。

「そろそろ終わりにしましょうか。」

「はっ？」

次に出てきたのは、

「それでは。」

極太のレーザー砲。

「あああああああああああああああああああ」

四つの風～金色の北風～（後書き）

機体説明はまたいつか。

四つの風～翡翠の東風～

―ｓｉｄｅ　飛鳥―

「決まったみたいだな。」

エレオ姉さんのレーザー砲で、ダリルという先輩の負けが決まったらしい。

「まぁ、妥当か。」

「なんですか、その反応は！」

「まるで、先輩が負けるのが最初から分かっていたみたいなセリフだね。」

「そんなの最初から分かっていた。エレオ姉さんは、それだけの実力者だ。」

まぁ、それでも、あれは使わなかったみたいだが。

「にゃはははは～。そうなのだよね～。エレオ姉さん強いから。」

後ろから、すごいハイテンションな声が聞こえる気がする。

まぁ、無視だ無視。

「ちょっと～。無視はひどいんじゃないかな～。」

知るか。

「う～ん。ならば、トウッ」

むにゅ

「なっ」

「あはははは～。おうおう、いつもながら、さすがの張りだね～。これが若さだね～。」

「くっ。いつまで揉んでやがる！」

「にゃはははは～。」

くそがっ。

「あの、友崎さん。そっちの人は？」

うん？　ああ、そういえばいたんだ。

忘れてた。

「この人も、俺の兄弟子だよ、織斑。」

そう言うと、この人は織斑に興味を移したようで、織斑に接近していった。

「ほうほう。君が、噂の織斑君かぁ～。いや、君、なかなかいい男だね！」

「えっ、ちょっ。」

「うんうん。まだまだ、実力は伴わないみたいだけど、意思の強さはなかなかと言ったところかな。」

「はいぃ？」

「いいねいいね。君、いいよ。おもしろいね。」

織斑の周りをくるくる回りながら、観察していく。

そうこうしてると、

「ちょっと、あなた、近づきすぎですわ。」

「それは、私の嫁だ。なれなれしくするな。」

オルコットとボーデヴィッヒが割り込んできた。

「ほう？」

「そうね。さっきから好き勝手言ってるけど、まずは名乗りなさいよ。」

「確かに、それが、人としての礼儀だしね。」

凰とデュノアも割り込んできた。

篠ノ之も織斑にくっついてるし。

「うむ。いいよ。名乗ってあげよう。」

そういって、少し緑がかった髪をなびかせ言った。

「私の名前は、フェイ・ランバード。よろしく頼むよ、後輩諸君！」

―side out―

―side エレオノール―

「はぁ、彼女が3年生唯一の専用機持ちですか。正直がっかりですね。」

試合を終え、ピット内で一人呟く。

「嘆いても仕方がないですね。」

「そうですね。彼女たちには、もっと成長してもらわないと。」

「あら？」

そこには、一人の最強がいた。

―side out―

―ｓｉｄｅ　一夏―

「フェイ・ランバード先輩？」

「ＹＥＳ！　フェイ先輩でもフェイちゃんでも果てにはお姉さまでも、気軽に呼んでくれたまえ。」

「はぁ。」

なんだこの人。

「なんだいその府抜けた反応は。若いうちからそれじゃあ、後々大変だよ。」

「余計なお世話ですよ。」

なんなんだこの人。

「織斑。その先輩に合わせると疲れるだけだ。適当に流しとけ。」

「なんだいなんだい。あっちゃんは～、冷たいぞ～。」

「知るかよ。」

「そういう子は、エレオ姉さんにお仕置きしてもらうといい。その胸を更に大きくしてもらうといい。」

「うるさいわ！」

ぶっ。

「お？　これはこれは、織斑君は、あっちゃんの胸に興味津々のようですな。」

しまった！

「そんな事はないですよ。」

「あっ、じゃあ、おしりかな。あっちゃんは、男みたいな態度の子だけど、体は誰よりも女の子なのだよ。」

「てめぇ！　なに言ってやがる。」

そんな事、誰も言ってない！

「いやいや、そういう訳でもないですって。」

「えっ、じゃあ、織斑君のそのハーレムはカモフラージュで、実はコレなのか？」

先輩はそう言うと、手の甲を頬に向けて、いわゆるあれのポーズをとる。

「違いますから！」

なんでそうなる。

「ああ、そういうこと。」

やっと納得したか。

「つまり、君は、そのハーレムの子たちを毎日とっかえひっかえで満足してるという事か。

やるぅ～。」

肘で突いてくる。

ヤメレ。

「そんなんじゃないですよ。」

「えっ？　じゃあ、もう立たないの？」

ちょっ、

「なんでそうなるんですか！」

「だって、女でも男でもない。そして、満足してる訳でもない。となったら、不能？ってなるじゃない。」

「女の子が不能とか言っちゃいけません！」

「それに、後ろの子たちは妙に納得してるけど。」

「ちが～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～う。」

授業開始？

―ｓｉｄｅ　秋夜―

「あ～。遅かった。」

俺が着いた頃には、もう試合は終わっていた。

「見てないからなんとも言えないな。」

せっかくだったから、どれだけ成長したか見たかったんだけどな。

「結果は、どうなったと思う？」

千冬が聞いてくる。

「見なくても言える。エレオノールの勝ちだろう。」

あいつに勝てる奴なんか学園じゃ楯無ぐらいだろう。

あいつでも勝てるか分からんけど。

「エレオノール？　それが、３年の転入生か？」

「ああ。エレオノール・フォン・キルヒアイゼン。俺の弟子の年長者。仕切り屋だ。」

「そいつが、噂の新人か？」

「いや、そいつは別。というか、もう時間じゃねぇか。」

とりあえず、現状をなんとかしないと。

「あ～。次の授業で使うから関係ない生徒は出ってくれ～」

「「「「「は～い。」」」」」

うん。聞き分けの良い生徒は好きだ。

「そうだ。フェイ。」

「なんだい、師匠？」

ここで師匠って言うなよ。

「ここでは、先生と呼べ。」

「はいさ～　師匠。」

コ、コイツ～

「まぁいい。お前、マリィは抑えとけよ。」

「無理。」

バシッ

「うぇええ。師匠が殴った～」

「即答するな。少しは努力しろ。」

「だって、無理だもん。あのバトルマニア。」

相変わらずなのね。

「まぁいいや。とにかく、頼んだぞ！」

授業だ、授業。

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　一夏―

「では、勝負ですわ。」

「別に構わないが、お前じゃ俺には敵わないぞ。」

「言いましたわね。泣いて謝らせてさしあげます。」

「構わないが、ハンデで付けてやろう。そこの金髪と銀髪も一緒で良いぞ。」

転入生がシャルとラウラを指差し言う。

「ほぉ～」

「へぇ～」

二人とも怖いよ。

なんでこの二人に向かって言うんだよ。

「ちなみに、なんで僕とラウラなのかな？」

「うちのクラスの専用機持ちで、手頃だと思っただけだ。」

ビキッ

あっ、これは、ちょっとやばいなぁ～

「いいだろう。相手になってやる。」

「そうだね。こうなったら、３人でもう二度とそんな事言えないようにしてあげるよ。」

あああああ、シャルの笑顔が怖い。

ラウラはナイフを出すな！

「とりあえず、授業受けようぜ。」

ああ、怖い。

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

―ｓｉｄｅ　秋夜―

「という事で、今すぐ勝負させて下さい。」

「え～」

なんで、俺は、詰め寄られなきゃならない。

事情は、飛鳥がオルコットにケンカを売って、それを買ったら、デュノアとボーデヴィッヒに飛び火した。

それで、授業時間にケンカさせてくれと。

「お願いしますわ、先生！」

コイツら、千冬じゃなくなったからちょっと元気すぎないか？

「いや、授業が」

「そこをお願いしてるんです！」

そこまで、重要なのか。

「ところで、オルコットは何に怒ってるんだ？」

「それ・・・・が・・・・で・・・だと」

「なに？」

「ああ、もう！　女としての尊厳に関わることですわ！」

なんで、顔を真っ赤にしてるんだよ。

「まぁいいか。」

仕方ない仕方ない。これ以上は、授業に支障をきたす。

「あ～。一つお知らせだ。授業内容は、急遽変更。多数のＩＳに対しての対応を実践形式で見てもらう。オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、友崎。頼んだぞ。」

「「「「はい！」」」」

仕方ない事なんだよ。

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

－ｓｉｄｅ　飛鳥－

「いいな。無茶なことをするなよ。」

「はい。」

まさか、授業中に闘うことになるとは思ってなかった。

「それと、ワンオフアビリティーの使用は許可しない。」

「使う気もありません。」

あれは、私の切り札だ。学生相手に使うつもりはない。

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　飛鳥―

「そう言えば、エレオ姉さん達以外と闘うの久々だな。」

あの中では、俺は弱い方だ。

だが、学生レベルで負ける気はない。

「久々に暴れるぜ！　ノトス！」

南風は堅し

―ｓｉｄｅ　一夏―

セシリア・ラウラ・シャルの３人が出てきた後に、紅い機体が出てきた。
紅い機体というと、箒の紅椿を思い浮かべるが、その機体は全くの別物。
紅椿と違って、重そうな機体。
紅を基本に所々入る緑のライン。
操縦者を守るかの如く肩に着く甲羅っぽいパーツ。
何処となく、亀をイメージさせた。

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　飛鳥―

「よっと。異常なし。」

問題は無い。

でも、ヤバイかも。

「よく逃げずに来ましたわね。」

「まぁ、逃げた所でどうにもならんがな。」

「・・・・・・・・」（ニコニコ）
敵さんも大分気がたってるようだ。
デュノアはずっと笑ってるし。
本当にヤバイ。

「それじゃあ、始めようか。」

「あら、自ら死期を早めるとは滑稽な方ですわね。」

「まぁ。さっさと地獄を味合わせてやろう。」

「行くよ。」（ニコニコ）

「戦闘開始」

「行きますよ！」

開始の合図を聞いた瞬間にオルコットが射撃してくる。
それに合わせて、こっちの反撃するための射線には、デュノアがシールドを構えて入ってくる。
ボーデヴィッヒは、側面に回って牽制してくる。
中々に統率が執れている。

「なら。」

シールドを二つ展開。
二つの射撃をシールドで防ぐ。

「シールドを二つ！」

「ケンカ腰の割りに随分大人しいな！」

「それなら、僕も！」

オルコットがビット、ボーデヴィッヒがレールカノン、デュノアがアサルトカノンでそれぞれ距離を置いて攻撃してくる。

「おら。」

それらを防ぎ、またはかわす。

ヤバイ。

「もう一度ですわ！」

「こんなのはどうかな？」

こんどは、時間差で攻撃してくる。

ヤバイ。

「少しは反撃の意思を見せたらどうだ。」

ボーデヴィッヒが近づきながら射撃してくる。

や、ヤバイ。

全ての攻撃を盾で防ぐ。

もう、

「駄目だし。」

「うん？」

「なんか言ったかな？」

もう駄目だ。

「まぁいい。とりあえず食らうといい。」

ボーデヴィッヒがワイヤブレードで攻撃しようとする。

まぁ、いいか。

「おらあ！！」

盾でおもいっきり殴りつける。

「なっ」

「目ぇ丸くしてんじゃねぇよ！」

シールドを仕舞ってバズーカを出す。

「食らっとけよ！」

「がぁああ。」

近距離で撃たれた事でボーデヴィッヒは普通に被弾。
まぁ、ほとんどゼロ距離みたいなもんだったし。

「ラウラ！」

デュノアが後ろから射撃しながら接近してくる。

「シールドユニット起動。」

俺の呟きに応じて、肩のパーツが動き射線にでる。

「くっ」

「私をお忘れでは！」

セシリアの三方向同時射撃。

「甘い甘い。激甘！　蜂蜜に黒糖とミルクチョコ入れたぐれぇ大甘だ！」

シールド展開して、防ぐ。

敵さんも一旦、攻撃やめたようだし。

「たらねぇ。たらねぇよ。んな、攻撃で俺に当てられると思ってんのか？
もっと、過激に苛烈に攻めて来いよ！」

じゃねぇと、つまんねぇだろう。

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

－ｓｉｄｅ　秋夜－

俺は、今、頭を抱えている。

「あのバカ。授業だって分かってんだろうな。」

ため息しか出てこない。

「なんか、すごい変わりようですね。ＩＳに乗ると性格変わるんですか？」

山田先生のご意見はごもっとも。
クラスの大半あまりの凶変ぶりにぽかーんとしてる。

「アイツはこれが素です。あまりにもひどいんで、冷静を装ってただけですよ。」

弟子の中でも、一番言葉遣いが荒い。
フェイは、頭が可笑しいだけ。

うん？　じゃあ、フェイよりいいか。

「おい、秋夜。聞きそびれてたが、あいつ等の機体はどうしたんだ？」

「ウサミミ製。」

「あのバカか。」

仕方ないよ、千冬。
アイツは天災だから。

「おっ、そろそろ決まるか。」

俺らが喋ってる間に、デュノアとボーデヴィッヒが近接戦闘、しかも挟み撃ちをしようとし出していた。

―side　out―

―ｓｉｄｅ　シャルロット―

「挟み撃ち。勝負ってかぁ。」

ラウラは射撃、僕はシールド出して突っ込んだ。

これで相手の真似だと思ってくれるといいんだけど。

「じゃあ、行きますよっと！」

友崎さんは、とりあえずラウラを止めにかかるみたいだ。

そう感じた瞬間に、瞬間加速。

今日は、まだ見せていない。これで、決められる。

そう思った瞬間、ラウラと目が合った。

ラウラも勝ち確信したようだし、

その奥で、セシリアがスターライトＭＫ―？を構えているのが見えた。

「これで、終わり！」

必殺のパイルバンカー・灰色の鱗殻（グレー・スケール）を打ち出した。

後ろ向きの背中にきまっ

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　飛鳥―

「びっくりしたぜ～。いや、顔に似合わず随分ゴツイの使ってんなぁ～」

「うそ・・・・・・・」

なにが起こったかというと、後ろからパイルバンカーをぶち込まれたから。
それをシールドで横殴りして、軌道をずらした。
しかも、俺の後ろには、ボーデヴィッヒがいる。
つまり、俺が何をしたかというと、パイルバンカーの軌道をずらして自分に当たらないようにしつつも、あまり遠ざけずボーデヴィッヒにぶつけるとう寸法。

デュノアは、ショックでフリーズしてる。
まぁいいけど。

「アロンダイト。」

気分的に口にしたかったからという理由で、武器の名を呼びながら

大剣を展開する。

「シャルロットさん！」

「えっ？」

オルコットの声で、正気を取り戻したか。
だが、

「遅いんだよ！」

大剣を突き出しながら、脚部のブースターを全開にし突っ込む。
大剣から、甲高く機械的な駆動音が響き渡る。
それを気にせず全力でぶつかる。
しかも、デュノアにぶつかっても減速は一切しない。

そのままの勢いで、アリーナの壁に叩きつける。

デュノアは、そのままＩＳを解除。

ぶつかった性で、周りは煙に囲まれている。

「後、一人。」

アロンダイトを仕舞ってから、
煙を突っ切って、オルコットに全速力で突進を仕掛ける。

「！」

オルコットは、突然のことに反応できていない。

「おらあああ！」

接近と同時にシールドを展開し、殴りつける。

殴られた勢いで、オルコットは体勢を崩して少し下降する。

そこを

「くたばれや！」

アロンダイトで突進。

モロに食らったオルコットをそのまま、地面に叩きつける。

その一撃で、オルコットはＩＳ解除。

その瞬間、

「勝者・友崎飛鳥。」

ブザーが鳴った。

模擬戦後

―side　秋夜―

「え～と、さっきの模擬戦のように、多数の敵を相手にする場合は
相手の攻撃を利用したり
相手の隙を突く事は重要になるぞ。分かったか？」

「は～い。」

うん。平和だな～
さっきみたいな事がなければだけど。

「それじゃあ、次の時間に遅れるなよ。」

授業終了。
とりあえず、トラブルはあったが、まぁいいだろう。

やりすぎな感はあったが。

「それにしても、お前の弟子は中々だな。」

珍しく千冬が褒めている。

「まぁ、さっきの試合を見ればそう思うだろうがな。」

そう、さっきの試合を見ただけだったらね。
その辺も、徐々に分かってくるだろうが。

「アイツの防御は中々破れないからな～」

「どうした？　さっきから腑に落ちないようだな。」

「まぁな。けど、それは、一夏辺りと一対一でやらせれば分かるだろう。」

「そうか。」

さてさて、次の授業次の授業。

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　一夏―

「さっきの大丈夫だったか？」

「うん。なんとか。」

「盾で殴るやつなんか始めてみましたわ。なんですの！　あの野蛮人は！」

「今回は、かなりアイツにいい様にやられたが次はこうはいかん。」

「シールドバッシュっていうんだっけ？　あの盾で殴るヤツ。」
「そうだったよ、確か。」
「あれ、俺、教えてもらおうかな。」
「「「「「なにっ！」」」」」
うん。あれ、なんか使えそうな気がする。
雪羅をシールドにして、殴る。
なんか強そうな感じがする。
「ちょっと、待ちなさいよ！」
「えっ？」
「えっ？じゃないだろう。お前には、私達という指導者がいるだろうが！」
「そうですわ！　なんでよりによってあんな野蛮人と。」
「誰が野蛮人だ。ふざけてんじゃねぇぞ。」
「あっ。」
セシリアが文句を言った瞬間に本人登場。
「友崎さん。おつかれ。さっきは凄かったな。」

「そうでもねぇ。というか、さん付けで呼ぶな気持ち悪い。」
「じゃあ、友崎。」
「それだったら、構わない。」
さん付けが、気に入らないだ。この人。
「お前、何しにきた！」
「ん？　野蛮人だのなんだの聞こえたから来ただけだ。悪いか？」
「ふん。散るといい。お前になど用は無い。」
「まぁいいけど。」
ラウラと言い合ってるけど、やっぱ、さっきの事もあって険悪だな。
「あっ、そうだ。友崎、俺にあの盾で殴るヤツ、教えてくれないか。」
「一夏。こんな女が、頼くわけっ」
「いいぞ。」
あれ、以外に簡単に答えてくれる。
「でも、あんなの使うの俺ぐらいだぞ？　必要なのか？」
「おう。近接戦の技のレパートリーは豊富な方がいいと思ってな。」

「まぁいいけどよ。」

「じゃあ、放課後一緒に訓練しようぜ。ついでに模擬戦も。」

「ああ。分かった。」

なんだか、この人。口悪いけど、普通に良い人だ。

「じゃ、俺は行くから。お前の後ろ、なだめとけよ。」

「へ？　後ろ？」

後ろを振り返る。

あれ？　なんで、皆そんなに不機嫌そうなんだ？

「なぁ？」

「「「「「なに」」」」」

「俺なんかしたか？」

「自分の胸に手を当ててみるといいよ。」

「ついでに馬に蹴られてみればいいかも。」

「むしろ、車にでもぶつかってみればいいじゃないんですの？」

「「・・・・・・・・」」

シャルとか、普通に不機嫌そうに話すし、ラウラと箒は、人も殺せそうなぐらいの雰囲気出して、黙ってる。

・・・・・・・・・・

あああああああああああああああああああああああああああああああああ

ーｓｉｄｅ　ｏｕｔー

ーｓｉｄｅ　秋夜ー

「一夏は相変わらずみたいだな。」

教室に入ろうとしたら、一夏がお付のハーレムにいろいろされてた。詳しく言うと、蹴られたり、蹴られたり、蹴られたり。

しかも、そのまま、放置されてったよ。

「お～い。一夏。生きてるか～」

声をかけると、声は出さないものの反応は示すので大丈夫だろ。

「後、数十秒で遅刻だぞ～　馬に蹴られても文句いない男よ。」
「なんだよ、それ。」
おお、返事してきた。しかも、後の方に。
「ま、程々にな。異性との付き合い方には気をつけろよ。後ろから刺されないように。」
「なんの話だよ！　秋兄。」
「これ、織斑先生だ。」ポンッ
出席簿で軽く叩く。
「だって、二人居るから言い難いぜ。」
「そうか。大変だな。頑張ってくれ。」
棒読み。
「真面目に聞いてくれよ。」
「いいから、教室入れ。」
「へ～い。」
一夏を教室に入れる。
ちなみ、授業は開始している。

「あ、ちなみに、一分遅刻。」

「でも、それは、先生と話てたから。」

「言い訳はいいから。織斑一夏遅刻と。」

「俺に味方はいないんだ・・・・・・・・」

一夏、世間はつらいものなんだよ。ｂｙ織斑秋夜

放課後・訓練

―ｓｉｄｅ　秋夜―

今日は、アリーナの管理を任された。
そこでは、一夏とそのハーレム、そして飛鳥が一緒に訓練をしていたので、その様子を見ていた。
なんか、一夏が飛鳥に教えてもらって、それを嫉妬の目で見ている周りといった構図。
そして、一夏と飛鳥が模擬戦をする事になったみたいだ。
結論から言う。
「勝者・織斑一夏」
うん。一夏が勝ってしまった。
あのアホが。
全然、弱点克服できてねぇ。

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―side　一夏―

「あれ？　なんか、勝ちまった。」

「いいわよ～　一夏～」

鈴とかは、手を振ってはしゃいでる。

セシリアやシャル、ラウラは、普段は負けてる俺が、自分に勝った相手に勝ったとあってちょっと複雑そうだ。

「ていうか、なんで、俺勝ったんだ？　だって、三対一で勝った相手だぞ。」

ISを解除して、着地する。

「友崎。手加減してたのか？」

他に勝てる理由が思いつかなかった。

友崎はなかなか答えないし、全く分からなかった。

「飛鳥は、手加減してないぞ。」

えっ？　じゃあ、なんで？

「そいつは、近接戦闘のみだったり遠距離戦闘のみの奴には、滅法弱いんだよ。

だから、デュノアやボーデヴィッヒには勝てても、一夏には勝てないんだよ。」

「おい、師匠。言うなよ。」

てか、

「いつからいたんだよ、秋兄。」

「今日、ここのアリーナを管理してるのは、俺だぞ。知らないのか？」

あ、そうなんだ。

「ていうか、師匠？」

「そいつは、俺が教えてた、なんつうか、弟子だ。」

「へぇ～」

じゃあ、強くても普通なのか？

「織斑先生。それでは、私が負けたのは、」

セシリアも負けたんだよな。遠距離だけだったのに。

「それは、単に奇襲できたから。スラスターとブースターを全開にしたらかなりのスピードになるからな。」

「では、あの一撃がかわせれば、私の勝ちだったという事ですか？」

「オルコットが、アイツの防御を突破できればだがな。」
なんか、セシリアはなんか愕然としてるんだけど。
「そんな、じゃあ、私が皆さんの前で負けをさらしたのはなんだったのですか。」
あ～、軽く落ち込んでるし。
「という訳だから、飛鳥！　調子に乗らないで訓練しろよ。」
「へ～い。」
―side　out―

―side　秋夜―
飛鳥ももう少し闘えるようになってくれないとな～
「先生。ちょっと、いいですか？」
とても耳障りの良い声で丁寧な口調で話しかけられた。

「お、来たな。久しぶりだな。ちゃんと訓練してたんだろうな？
エレオノール。」

「先生。朝にも、軽くですけどちゃんと挨拶したじゃないですか。
ええ、それはもちろん。皆、ちゃんと訓練はしてましたよ。」

エレオノールは、自慢のウェーブのかかった金髪をなびかせ、軽く、
上品に笑いながら答える。
相変わらずのお嬢様っぷりだ。
オルコットが、お淑やかだったらこんなんなんだろうか？

しかし、訓練は、ね。

「ま、どうせ、フェイ辺りが騒いだんだろ？」

「そんな所です。」

相変わらずのようだ。

「所で、マリィは？」

「あの子は、何処でも変わりませんよ。」

「そっちも相変わらずだ。」

軽く笑ってしまう。

自分の個性に溢れた弟子達があまりにも相変わらずだったようで。

「まぁ、マリィにはあまり派手に暴れさせるなよ。ただでさえ、アイツは人目を引く。」

「分かっています。その辺は、私にお任せください。」

「頼むぞ。お前は、早速一暴れしたようだからな。」

「暴れただなんて。ただ、実力を見たいと言われたので、お相手差し上げただけですよ。」

「まぁいいか。じゃあ、頼んだぞ。」

貴重な新人を失うわけにもいかないし。

放課後・訓練（後書き）

ノトス（南風）

赤がメインカラーで所々に緑のラインが入っている。
肩に甲羅をイメージさせるシールドユニットが付いている。

防御性能に優れ、一般のＩＳに比べてややスピードが遅い。
しかし、一部可変式で、エネルギーの消費が多くなるが、ブースターを使えるようにできる。
その状態にすると、防御性能がガクンと落ちるが。

武器
アロンダイト
巨大な大剣。
剣だが、振るには少し大降りで隙も多くなるため、基本突進なので使用場面は限られる。
斬っただけでは一撃で落とせないが、突進時にスラスターやブースターを全開にした突進は読みやすいが一撃必殺の力を誇る。
また、内部でモーター？が超高速回転していて、熱波を放つこともできる。

バズーカ
特筆する事は特にないただのバズーカ。
ただ威力だけはかなりのもの。

シールド
同時に二つまで展開できる、殴りやすいように少し丸みを帯びたシールド。

シールドユニット
肩に付いているシールド。
身の周りならブルーティアーズのように操作できる。

???

―side　???―

「おいおい。円卓の奴ら、ちょっと力入れすぎだぞ。」

「まぁね。ハガルは動かさないよね、普通。しかも、専用機持たせて。」

「それは、明らかに私たちへの牽制でしょう。俺は、いつでも動けるぞって。」

私の目の前で、3人が討論している。
少し悲観的な会話になっているが、仕方が無いことだろう。
それだけ、厄介な奴が動いたってことだ。

「しかし、いくら牽制のためとはいえ、普通生徒相手に専用機使うかよ。」

「そこは、同意しますよ。」

「大人気ないよね～。」

「それだけ相手は警戒してる。」

今日、集まってから初めて私は口を開いた。

「まぁな。さすがに、円卓全員は動かせない。」

「だから、一番のカード、一枚で動きを止める。」

「理に適ってはいますしね。」

それは、全員元から理解しているようだ。

「ハガルは一人。」

「なら、薄いところから潰すってか。ま、一番利口だろ。」

「そうですね。恐らく、ウルは動かないでしょうし。」

「そうなの？」

1人の言葉に私を含めた3人が呆れる。

「じゃなかったら、わざわざウルの居る所にハガルが行く訳ないでしょう。」

「あ、そうか。」

「「「はぁ～」」」

頭が痛い。

「とりあえずは、エオローやスリサズ、テュールを刺激しないように作戦を進めるって事でいいか？」

「そう。特にエオローとテュールには手を出さない。いい？」

「「「了解」」」

一人で私達を止められると思うなよ、更科秋夜。

???（後書き）

秋夜の旧姓公開〜

もう一人の代表候補生（前書き）

久々の投稿です。
お待ちしている方がいたら、お待たせいたしました。

もう一人の代表候補生

―ｓｉｄｅ　秋夜―

「え～と、全学年合同タッグマッチ？」

千冬の話では、また、大会をやるらしい。

「ああ。今年に入ってから事件の多さを考えると、専用機持ちのレベルを上げるしかないだろう。
よって、その一環としてタッグマッチという訳だ。」

確かにレベルアップは必要なんだが、

「専用機持ち以外は？」

「それはそれでまとめて大会にする。」

「う～ん。」

「なんだ？　気になることでもあるか？」

気になることね～。
あるけどさぁ～。

「この時の警備体制は？」

「教師陣が当たるが。まぁ、臨機応変に対応するしかないだろう。」

「ホント、この学園って厄介だな。」
ＩＳは生徒に貸し出す分減る。
他の国の軍隊は呼べない。
なによりも、
「人員不足だな。」
「まぁ、ある程度は仕方ないだろう。」
その通りなんだけど。
「うん？」
専用機持ちの数が、３年２人。２年４人。１年が・・・・８人？
箒、オルコット、凰、デュノア、ボーデヴィッヒ、一夏、飛鳥。
「千冬。専用機持ちの人数、間違ってないか？」
「いや、あってる。本当はもう一人いるんだが、専用機がないんだ。」
「専用機がない？」
あ、ホントだ。え～と、
「更識簪？」
さらしき？

―side　out―

―side　一夏―

「妹をお願い！」

「へっ？」

どういう事？

「え～と、私の妹で更識簪っていうんだけど。タッグマッチで組んであげてくれない？」

え～と、色々言いたいけど、まず、

「妹、居たんですか。」

「そう、とってもいい子なんだけどね。」

「けどね？」

「あの子、暗いのよ。」

言い難そうに言う楯無さん。
それは言い難いでしょう。
でも、それを聞いた俺は、それ以上に反応に困ります。

「特に最近はそれに拍車がかかってるのよ。」

「それ、俺に関係ないでしょ。」

知らない人の事を俺のせいにされても困る。

「それがそうでもないの。」

「えっ？」

「一夏君の白式、開発している所は？」

「倉持技研です。」

「では、白式の前にはＩＳの開発をしていました。でも、特例でＩＳを一機用意しなければなりません。
さて、開発中のＩＳはどうなった？」

「え～と、完成している？」

「はずれ。一夏君、一つの研究所で二つのＩＳを同時開発出来るほどの技術は無いのよ。
これくらい、分かってくれないと困るのよ。」

そうは言っても。
うん？　待て。
嫌な予感が止まらない。
汗も止まらない。

「あら、分かっちゃった？　そう、簪ちゃんは、日本の代表候補生。つまり、簪ちゃんのＩＳは、」

楯無さんが、とびきりの笑顔で、

「完成してない所かもうほっとかれてるの。」

俺の知らない所で、その影響受けた人がいる事を始めて告げられた瞬間だった。

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

－ｓｉｄｅ　秋夜－

「にしても、災難だな。一夏とかぶらなきゃどうにでもなったろうに。」

更識妹の資料を思い出しながら言う。

「おっ！　噂をすればなんとやら。」
目の前に小柄な女子が一人。
「更識簪。」
「！」
すげぇビクッてしてる。
後ろから声をかけたから驚いたか？
「・・・・・なんですか・・・・・・」
ＩＳの学園では見たことないぐらい静かだ。
というか、この手のタイプはあまり付き合ったこと無いな。
「特に用はないんだが。資料見て気になったから、声をかけてみただけだ。」
「そう・・ですか・・・・・」
「ああ。特に、自分でＩＳを組んでるなんて聞いたら、おもしろうそうだからな。」
「・・・む・・・」
少しだけ顔が引きつった。
表情があまり変わらないけど、見る奴がみれば分かるぐらいってか。
しかも、警戒してるみたいだし。

「相変わらずだな、お前。」

「えっ？」

「初めて会ったような顔してるが、お前が小さい頃は結構遊んだりしてたんだぞ。
織斑になってたから分からなかったか？」

そう、実は更識姉妹とは初対面ではない。

「更科秋夜。覚えてないか？　更識家の分家筋の一派。そこの放蕩息子って。」

「・・・・・もしかして、お姉ちゃんの。・・・・・」

「そう、更識楯無の元許婚。その更科秋夜だ。」

俺って、楯無の許婚だったんだよね。
家を出たから、解消されたけど。

「という訳で、お前の作ってるＩＳ、見せてくれないか？」

面白そうな事、見逃せるか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0274w/

IS～黒き学園の守護者～

2011年10月13日01時02分発行